

【論文】

博物館資料と研究およびその利用

Research and Utilization on the Museum Specimens

布谷 知夫*
Tomoo NUNOTANI

1 はじめに

1970年代の後半から近年にかけての博物館学の研究の成果は著しいものがあり、例えば加藤(2000)がまとめているように、多くの研究成果が著わされている。特にこの数年間は「日本ミュージアム・マネジメント学会」のような新しい学会が生まれ、学術会議でのシンポジウムの開催や各地での様々なテーマでのシンポジウムなどの開催、多くの本の出版やインターネットでの議論など、いろいろな機会に博物館が話題にのぼることが多く、博物館の議論も非常に幅広く行なわれるようになってきている。

しかしその中でも博物館資料についての議論は比較的少ない。有元は博物館学シリーズの1冊として編集した「博物館資料論」(有元 1999)のなかで、学芸員養成課程の必修科目に対応する編集であるとしながら、資料論として1冊の本にまとめられたのは初めてであり、博物館資料論という分野は「博物館資料が博物館のさまざまな機能すべてに関わるため、取上げるべき内容は多岐にわたる」ためにこれからの分野であるとしている。もちろん博物館資料についての論文や出版物は数多くあるが、資料論としてまとめられた出版物はたしかにごく少なかった(段木 1998、加藤ほか 1999)だろう。また博物館資料についての議論の内容も、資料論の中の資料整理保存の技術論が中心であったように思われる。その意味では有元が指摘するように博物館資料を博

物館の諸活動全体に関わったものとして捉え、博物館資料論を考え直すことで、逆に博物館ではなぜ資料を集めるのか、社会的な要請はどこにあるのか、そのためには何を収集するのかなど、博物館の社会的な位置を考え直すことにつながると思う。

これまでの多くの議論では、すでに述べたように博物館資料論の中の、博物館技術学としての資料整理保管が中心で、資料に関わる博物館学の理論については、あまり議論がされてこなかった。その一方で、現場での資料整理保管についての技術は、自然科学分野、歴史科学分野などを問わず、かなり以前から確立された方法論があり(日本博物館協会 1973、青木 1985、安藤 1998、記録史料の保存・修復に関する研究集会実行委員会 1995)、整理保管手法も博物館ではほぼ共通した方法が使われ、現在はコンピュータ技術への対応などのどちらかという新しい技術に対する議論が行われているといえる。

それに対して博物館学としての資料論は大学等での研究者によって議論が行なわれていることが多く、現場では博物館に資料があるのが当然のこととして、その意味については議論がされていなかったように思う。菅根(1998)は資料論が振るわなかった理由として、「学芸員が博物館資料はすなわち実物資料であると簡単に連結してしまう観念を共通して持っていたという点」をあげている。しかし博物

*滋賀県立琵琶湖博物館

平成13年1月15日受理

館学は、博物館現場が、その本質を見極めた上で利用しやすい場になることを目指しているはずであり、現場での実践と結びつかない博物館学はその意味を発揮できないと同時に、博物館学の理論の裏付けが無い現場での実践は、大変に弱く、発展性がとばしいものとなるだろう。

本稿は博物館資料について、その位置付けと特に研究との関わりを中心にして考察し、同時に同じ視点を持って、資料とその収集や利用における博物館利用者ととの関わりについても考えようとするものである。

なお、本稿では博物館資料の中の「モノ資料」のみを扱い、いわゆる「コト資料」あるいは「デキゴト資料」については取り扱っていない。

2 博物館資料と研究との関係

現場での博物館資料論を考えるという立場で、まず問題となるのは、博物館資料と研究との関わりであろう。博物館法第二条（定義）の中では、「あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とした機関」とされており、この意味についての議論は以前から行なわれている。ここでいう資料とはこの条文の中の前にある「資料を収集し」を受けており、そのままに解釈をすれば、博物館での研究は、博物館が保管している資料についてに限られているように受け取ることができる。

博物館で「資料を研究する」ということについてはこれまでもいくつかの議論があるが、その背景には、博物館での研究は必要なのか、あるいはどういう研究が必要であるのか、ということがあった。最近でこそ博物館で研究が行われることについては異論はなくなっていると思われるが、博物館で研究が必要なのか、という議論は博物館法制定直後から始まっている。もちろん博物館で研究を行うことをまったく否定する意見はでてこないが、例えば「博物館学」についての講演がおこなわれた第11回全国博物館大会の講演およびそれに対する意見（浜根1963）においても、研究が必要としながらも、それは博物館での教育をするための研究であり、

ここでいう研究とは、academicなものではなく、あくまでmuseumology的なもの、すなわち、この「もの」をいかにすれば博物館的な展示物

とすることが出来るかという研究である。academicな研究は学者や、研究機関にまかせておけばよい。

と発言している。このような研究についての意見はその後長く続いている。最近では博物館で行うのは事業を進めるための研究であるべきという主張を積極的に述べる意見を聞くことはあまりないが、いわゆるacademicな研究については言及しないという形で現在の文献などの中でも続いていると言えるのである。

博物館における研究のあり方について、ある程度の決着が見られたのは、1970年代の後半のことであろう。

新井（1973）は博物館を専門的な研究を行う博物館（Curatorial Museum）と資料整理保管のような博物館事業を行うことを重視する博物館（Non-curatorial Museum）とに区別し、博物館での研究のあり方についての整理を行い、博物館ごとの目的によって研究への比重のおき方が違うことについて議論を行った。そして研究を行う博物館での研究のあり方についても、研究とその他の博物館事業とが総合的に行われることを前提として、千地（1978）によって次のようにまとめられた。

博物館の学術研究は、博物館資料の専門的な調査研究という博物館法の表現にもみられるように、従来、資料を収集し、収集されたものについて調査研究するというように理解されがちであった。たしかに、このような実態があることは拒めない面もあるが、しかし本来は、博物館にはそれぞれの目的があり、その目的にそった調査研究がなされ、その過程で「もの」が収集され、資料化され、調査研究の成果の上に立って、資料が展示され、あるいは整理・保管されるのである。

このように博物館での研究は、博物館が収蔵している資料を研究することだけではないことは、ほぼ共通の認識となっているといっていいいであろう。したがって、博物館の研究は、資料に関する分類学や保存科学などだけに限られる必要はなく、博物館の設置目的を実現することを目標とした幅の広い分野で行われるものであろう。そして研究の過程で、新たに資料が収集され、その結果として成果の公表や

展示作りが行われると考えられる。

このことは逆に最近になって、大学などで分類学の研究が行われなくなっていることを理由に、分類学は博物館で行うのがよいといわれることがある。博物館では分類学を専門とする部分が大きいことは事実ではあるが、博物館は分類学のみを行っている機関ではないため、大学等で分類学を行わないことは学問的な責任放棄であることは明確であると考えられる。

しかし一方で資料収集保管は博物館の機能の中の非常に大切な部分であることはまた事実であり、改めて博物館資料と研究との関わりを明確にしておきたい。千地の議論は「博物館では資料があるからそれを研究するのではなく、研究をするからその学芸員の元に資料があつまってくる」という主旨である。それは博物館の資料と研究との関係を考える上では非常に重要な内容である。

大部分の博物館には資料が収集されている。その資料を研究するということとはごく自然といえる。しかし現実には資料の研究が始まった場合には、確認のためや関連事項を調べるために、新たな資料が必要となり、その収集をしながら研究を続けるというのが普通である。その結果として成果が論文や展示等の中で公表され、その成果を見て、関心を持った人、あるいは同じ様な研究をしていた人などとのネットワークができ、それによって研究が進展したり、あるいは新しいテーマでの研究が発展したりする。そういう専門家としての研究あるいは博物館利用者と一緒になった研究の結果として、新しく資料が集積されていき、その新しい資料があるために、さらに新たな知見が明らかになったり、別のテーマへと研究が進む場合もある。

あるいは博物館の学芸員がある分野の研究をしており、その分野の専門家であることが広く知れわたることで、その分野のコレクションが寄贈されてくることが多い。アマチュアの研究者が自分で集めた資料類を持ち切れなくなって、そのコレクションを専門家としてあつかってくれる人がいることを理由に、博物館に寄贈されるというケースはかなり多い。

このように博物館では、当初はそれまでに収集されていた資料を使って研究することは当然である

が、研究が始まり、公表をすることで次の段階に進み、多くの新しい資料が集ってくるのである。

資料があるから研究をするという立場では、博物館の外部や利用者に目を向けながら事業を行うという博物館としての方向性が感じられず、また個別の研究成果は上がるかもしれないが、研究テーマを発展的に継続することは難しいであろう。

資料を直接に研究する分野以外の研究でも、同じようなことが起こる。野外での生態学的な研究や、地域での無形民俗や現在の暮らしの研究においても、研究の中で知合った人との結びつきから、あるいは自然を調査する中での発見や人の情報から、やはり関連した資料が収集されていく。このように研究分野やテーマにかかわらず、博物館では発展的な研究を進めることによって、その学芸員のもとに資料が集ってくるといえる。そしてこのような学芸員個人に資料が集ってくるといような例は、おそらくこの博物館でも普通に経験していることであろう。

その結果として、博物館を特徴づけるような特色あるコレクションの収集につながっていくのである。博物館における特色あるコレクションの集積は、学芸員の実力によるといわれることがあるが、やはりその実力とは学芸員の研究者としての研究成果であり、そこから生じる資料の質の高さである。

このように研究を主体として考えるか、資料を主体として考えるかでかなり博物館の資料収集の基本的な方針が変わってしまうであろう。例えば博物館としての資料収集方針には（倉田・矢島 1997）

質、量ともに優れたコレクションを形作るためには、何を、どのような方向で、どのような範囲で、どのような基準に基づいて収集していくかが明確にされていなければ成らない。

とあり、また藤原（1998）は

博物館の収蔵庫は、要らなくなったモノを仕舞っておく納屋ではないのである。資料の収集には一定の方針と基準が必要で、その意味において、博物館収蔵資料とは、基本的には学芸員によって十分に検討された収蔵基準によって集められた。「秩序ある資料群」であるべきである。

としている。このような積極的な資料収集方針にお

いては、まさしく研究者である学芸員が、その専門性を活かしてコレクションの収集計画を持つことになるであろう。

しかし一方で、博物館としての基本コレクション（参照標本）の集積や、その博物館がおかれた地域の自然や暮らしに関わる資料の収集も、博物館にとっては重要な業務である。このような学芸員の直接の専門外の資料群を研究との関わりでどの様に位置付けておくかが課題になる。

もちろん博物館があつかう分野の資料はもれなく集ってくる方がいい。そしてどんな資料であっても収集しているということを博物館に対する社会的な要請と考えることもできるだろう。しかし、それは最初から実現させることは不可能である。もしそれを博物館の方針として主体的に収集するのであれば、やはり学芸員が自身の専門の幅を広げて、出来る限り多分野の専門を持つように心掛けるということが、ひとつの解決策である。多くの場合には学芸員は大学時代以後の継続したテーマを持っているものであるが、そのテーマの追及とともに、博物館が求める設立理念に従ったテーマを別個に持ち、利用者とともに、利用者を巻き込みながら、少しずつ研究の幅を広げ、そのことでより幅の広い、基本コレクションの収集に勤める、ということになるだろうか。つまり、基本コレクションの収集についても、長い時間はかかるだろうが、やはり研究を主体にして考えることができるであろう。

現実にも館あたりの学芸員数はそれほど多いわけではなく、自然を1人、歴史を1人で担当しているというような例の方が普通である。そういう学芸員の場合にも、1人であるから分野の全てをあつかうということではなく、ある分野についての専門家として発言ができることで信頼され、資料が寄贈されてくるのである。

3 博物館資料の条件

博物館資料は、単に博物館にモノが持込まれたら、それがそのままに資料となるわけではない。このことについてはこれまでにも多くの議論がある。加藤(1996)は

厳密にいうと博物館に収蔵される資料がただちに博物館資料と呼称されるものでは決してな

く、当該資料に対して、整理・調査・研究という過程を経て価値ある情報を引き出す手段が講じられることにより始めて博物館資料となり得る

と述べており、また例えば樋口(1997)は

博物館に収蔵されていれば、その「もの」は全て博物館資料であるとは必ずしも言い切れない。なぜなら、博物館資料とは、上述のように博物館の機能を果たす上で必要な「もの」である。そのためには、収集した資料が調査研究されているか、あるいは博物館において研究対象となり得る情報を有する「もの」でなければならない。また「もの」には基本的な情報が必要である。

としている。一方、伊藤(1993)は博物館資料として完成するためのプロセスとして

①潜在的価値を持つ素資料を価値判断し、選択することによって学術的・教育的価値を明らかにすること。②さらに、そうした資料の活用のための条件や方法を決定すること。

としている。用語は違うが、①は収集と研究、②は整備にあたるものであろう。同様の議論は多く、共通することは収集、整理保管され、その価値が研究されたものを博物館資料と言うということである。このことについての異論はほとんどなく、さらに加藤(1996)はこれに加えて

研究のない博物館は本来は存在しないはずであるのにもかかわらず、今日一部に認められる研究を伴わない、あるいは研究に熱心でない博物館における収集資料は博物館資料と呼称するに値しないものとなってくる。つまり、博物館資料は博物館と称する研究機関において収集保管され、研究された、もしくは今後も継続的に研究対象となり得る要素をふくんでいるものでなければならないと考えられる。

といいきっている。しかし「収集、整理保管、研究」の中身はどういうことであろうか。収集と整理保管については、技術的な比重が大きいが、目的を持った収集と、博物館に入ってくる以前の採取場所や保管場所等の基本情報がついていることが資料となりうるための最低の条件である。いわゆる資料ラベルに書込まれている、博物館に持込まれる以前の情報

であり、これがなければ資料となりえないことは博物館資料の前提である。

これに対して博物館資料である条件となる研究とは何であろうか。まず最低限度の基準としては、ラベルをつけるモノの名前がわかることであろう。学芸員の手を経て、名前が確認され、「もの」の属性などが確認されて、ラベルに書込まれ、資料台帳に記入し、あるいは最近ではコンピューターに登録される。この過程での資料の取扱によって、「もの」が持つ情報が明らかになり、博物館資料としての価値を持つことになる。一般的にはここまでの取扱は研究的な要素を含むとともに、資料整理保管のための作業でもあり、「収集、整理保管、研究」がされたものが博物館資料であるという議論、あるいは「今後の研究対象となり得る要素」を含む、という議論とも整合するものである。したがって、本来は「収集、整理保管、研究」は一体となって行われていることになる。

さらに加えるなら、資料として登録される前の、同定の判断や真贋の判断、資料にかかわる情報のヒアリング、保存処理の判断等は、学芸員の研究者としての実績によって可能になるものであり、それらも研究として考えることができる。したがって博物館資料であるための条件である研究とは、以上にあげたような個々の資料そのものについての、いわば一次的な研究であり、そのような資料が集積されていく中で、次にそれらの資料を使った二次的な研究が始まるといえそうである。

このように博物館資料であるための条件としては研究されていることが上げられるが、その研究の中身には多少の幅があるようである。しかしいずれにしても、博物館資料は博物館の研究との関わりで見ることが必要であるという点は非常に重要である。

そして博物館資料の条件が「収集、整備保管、研究」であるということの目的は、利用するためである。どのような利用方法であっても、いつでも活用することができるような状態で整備されていることが博物館資料の前提条件であり、利用するためにこそラベルを付け、登録される。したがって本来であれば、博物館資料である条件としては、使える状態で整備されていることということをつけ加えることになるだろう。もちろんこのことは資料の整備保管

という言葉に含まれている筈であるが、整備保管という場合には、収蔵庫に入るまでを意味する場合が多いようである。

なお、伊藤（1993）は、博物館の資料保管機能の特徴として、「第三者が活用することを前提として、資料の状態を保ち、利用の安全を計ることを目的とする。」ということあげている。ここでいわれていることは、使える状態で整備されているということにつながる議論である。

4 博物館資料の利用

博物館資料の利用目的は、青木（1999）によれば「展示、研究、保存、教育」をあげており、樋口（1997）が「学術研究、展示・教育、保存」をあげ、加藤（1996）が「展示、研究、保存と、それらの横断的なものとしてレプリカ」をあげている。各事業の重みのニュアンスは異なるかもしれないが、ほぼ同様の主張であり、展示を一義的なものとし、保存上の問題や技術上の問題を除けば、博物館資料は展示資料として活用することができるとしている。そして展示以外の教育的な利用については、資料の破損や劣化、損壊などがおこらないような注意とレプリカなどの使用を優先することをあげている。

このような議論は資料保管の立場からは当然のことではあるが、同時にそれ以上の資料利用の可能性はないのであろうか。もちろん利用と保存とはあい反することであり、博物館の資料保存の役割が大きいことは当然であるが、それにしても博物館の資料は本質的には利用するために保管されているといえることができる。博物館の設置目的が収集から展示へ、そして利用者の活用へ、と変ってきているということは「第三世代の博物館」（伊藤 1993）として議論がされているが、博物館資料についても利用ということにより意識を向けることはこれから求められることであろう。博物館資料の収蔵目的は将来の世代にたいして資料を残すということを説明されることもあるが、それも基本的には将来の世代の利用が可能ないように保管するのであり、現在の利用も当然考えられるべきであろう。

利用するという立場で考えると、博物館資料の中にも、かなりの幅があると思われる。例えば光を当てることも避け、温湿度を一定にした中で保管する

ことが必要な資料もあるが、生物・地学・考古などの資料の中には、それほど神経を使う必要の無い資料も存在する。あるいは生物資料の場合には、基本参照標本として、利用するための資料を作成する場合もある。そのような可能な資料を、できるだけ積極的に活用するという方向で考えると、展示や専門家による研究利用以外にも、二つの利用形態が考えられるであろう。

一つは博物館が行う、講座や講演会等での利用である。博物館はモノを持っていることが特長であり、その博物館が行う事業はモノを見ながら行う方がずっと効果的であることは経験的にも明らかである。そして使用するモノはレプリカでも効果はあるだろうが、直接に身近に見て、あるいは触って、そのモノなどについての話を専門家から聞くような場合には、展示以上に実物が訴えかける力は大きい。例として、小学校の生徒に土器の話をし、展示してある実物の完形品の土器を順に持たせるといった実践例(金山 2000)が紹介されているが、子供たちも、実物を手にして、丁寧に扱い、実物にふれることで学習効果も非常に大きいということである。学校での総合的な学習の展開の中で博物館への期待が大きい、このような活動をとおして、博物館が利用者により身近な存在となる可能性もある。可能な限りにおいて、実物資料を使った学習活動を行ってみたいものである。

もう一つは、より日常的な博物館利用者への対応である。博物館利用者が自分の学習のために博物館の資料を利用したいというような場合や、あるいは博物館に一般的な質問をしてきた利用者に対して、資料を見ながら説明をした方がいいような場合がある。このような場合も、博物館資料を使う方が具体的に効果のある説明ができるのであれば、資料を活用する方がいいであろう。少なくともこのような例の場合には、学芸員がついているので、特別なものの以外であれば、その資料の取扱については、それほど問題はない。もちろんレプリカですますことができる場合も多いだろうが、対面して細部について話をするような場合には、レプリカでは間に合わない場合も生じる。実物であればこそその説得力があり、またその利用者にとっては博物館という場を理解することにつながるであろう。現実には資料をとりだ

す、あるいは収蔵庫等に案内することの煩雑さと、標本に対する防虫などの問題を考慮する必要がある。

このような二つの例は、その中間のようないろいろな資料利用の形態があると考えられる。いずれにしてもどのような場合にも、資料をつかって利用者と対応するということの効果を考え、できるだけ資料を活用する方向で考えることはできないだろうか。

琵琶湖博物館の場合には、利用者を「ついで様」と「その気様」と区別して、特に目的がなく博物館を利用する人も、目的がはっきりした人に対してもその人に向いた博物館の活用プログラムを準備しておく、ということを考えている。上に上げた例はどちらかというと目的がはっきりしていて博物館を訪れる「その気様」であり、そうでない人に対しても博物館資料を使った博物館の楽しみ方ができるように、博物館の側は考えておかなければならないと考える。例えば琵琶湖博物館では、展示室での学芸員による「フロアトーク」や「展示交流員と話そう」のような機会に展示していない資料を活用したり、総合案内や質問コーナーなどに目立つ資料をおくことで、来館者との交流の切っ掛けになるというようなこともある。

なお、最初から利用するための「貸出資料セット」を準備して学校等の貸出すような場合もある。このような場合には、レプリカでセットを作るような例もあるが、実物資料の場合も見受けられる。

5 利用者による資料収集と利用

現在期待されている博物館を「利用者にとって使いやすい博物館」あるいは「利用者が主体的に利用することができる博物館」と考えると、博物館の全ての活動分野において、利用者の主体的な参加が可能な状態(布谷 1998)を準備することが望まれる。資料収集と資料整備保管においても、そのような視点で考えてみたい。

博物館の活動に参加してくる利用者が、博物館に資料をもたらす例は多い。自然系の分野では、積極的な利用者から持参したモノの名前を聞かれ、その名前を調べることで、その資料が博物館に寄贈されてくるという例は多い。民俗系や歴史系でも同じよ

うな例は見られる。このような例は日常的に学芸員が利用者の質問に応え、信頼を得ているからこそ起こることである。

また博物館の資料を利用して卒業論文を書いたり、同好会の原稿等を書く人がいつもいることも博物館ならではの長特である。現実にも資料が好きなので、博物館資料整理の手伝いをさせてほしい、というような人が現れる。このような人達の活動を支援することは利用者の期待に応えることであり、結果として資料の整理が進む。博物館の資料は多くの人に活用され、研究されることで、その資料に関する情報が増加して、その値打ちをより高めるという性格のものであり、利用されることは博物館の目的にも合致する。

利用者による資料収集と活用についての組織的な好例は神奈川県植物誌を作成する過程(浜口 2000)で見ることができる。これまでの大多数の県の植物誌は、県の植物同好会などが会員の情報を集めて作ったり、あるいは県の名の通った採集家の標本を中心にして作られる例が普通であった。神奈川県の場合には、1979年に県立博物館と地域の植物会が中心になって計画をし、調査者は一般募集をして集った約150人の植物についてはほとんどシロウトのメンバーの手で、9年間をかけて1988年に1400ページを越える冊子として発行された。この9年間に神奈川県を7ブロックと108の区域に分け、それぞれの区域ごとの植物誌が作られ、そのまとめとして県の植物誌が作られるような構想で、植物の採集をしながら名前を調べ、連絡誌を発行し、難しい植物の仲間については、専門家を呼んでまとまった勉強会を行い、結果としては、12万点の資料を収集整理し、同時に植物のシロウトであった参加者は、植物に詳しい調査者となった。そして作成方法がすべて手弁当であるというユニークさとともに、分布図の細部のスケッチなど、内容的にもこれまでの県植物誌とは全く違った新しいものとして高い評価を受けた。

この調査の中心に県立博物館と、平塚市、横須賀市の博物館がセンターとして機能したことが、この植物誌が成功した要因(大場 1988)であるという。つまり全くのシロウトが博物館に集り、自主的に学習しながら、12万点の資料を集め、植物の専門家でも普通は一生をかけてもできないような大きな研究

成果を上げたことになる。そしてその調査グループは、植物誌の発行以後も調査を続けて、現在は相模原市、厚木市等いくつかの博物館を拠点に加えて、2001年に改定版を発行する計画であるということである。

琵琶湖博物館では、その開館前から生物の分布や気象、地域での水の利用、水辺での子供の遊び等についての住民参加型調査を繰り返し実施し、情報、資料、あるいは映像等を集め、その参加者数は絶対数でおよそ二万人程度をかぞえた。いわゆる「デキゴト」情報の収集が多かったが、「モノ」もかなりの数で集ってきている。また古い写真の展示会を巡回展示として行い、博物館から地域への働きかけの結果、多くの古い写真の寄贈があった。あるいはいくつかの博物館を活用する研究会があり、例えば、「蜻蛉(とんぼ)研究会」は県内をメッシュに分けて徹底した分布調査を行い、その結果98種のトンボの分布図を作り上げて、滋賀県を全国でも最もトンボの種類が多い県とした。その結果は博物館の企画展示会として公表され、出版物としても公表された後で、資料の大部分は博物館に寄贈された。

あるいは琵琶湖博物館のフィールドレポーターという制度では、メンバーで自主的に調査テーマを決めて毎年二～三の調査を行っているが、例えば2000年春の「田んぼの生き物調査」では、学芸員とともに、生き物分布図を作り、資料の収集とともに、新たな知見を得た。また「はしかけ」という自主活動グループの活動では例えば滋賀県内の小河川の魚の徹底した調査を始めており、あるいはその収集された魚の整理と登録の作業も学芸員の指導の元で、「はしかけ」のメンバーが行っている。

このような例は現在の博物館では数多く見ることができるであろう。つまり専門家だけではなく、一般の利用者が自分たちの学習を目的として博物館に集り、学芸員を中心とした学習(調査)の結果、大量の資料を収集し、登録して、同時に資料を使った二次的な研究成果までしてしまうという例である。

こうした場合、登録され収蔵庫にある資料の管理の責任はもちろん博物館の学芸員にあるが、利用について、もちろん取り決めを作りながらも、その利用者が研究用に利用できるようにすることが必要になってくるであろう。つまり収蔵庫を利用者の共通

の資料庫とせざるをえない面ができてしまう。もちろん収蔵庫としての本来の機能を損なわないようにするための課題は多いが、利用できる方向での検討を行わざるを得ないであろう。利用者が積極的に博物館を利用し、資料を集め、整理をしてくれる状態は博物館としては理想的と考えてよいと思うが、その結果は資料の利用についても、利用者の声を活かさなければならない、という新しい方向を生みだしている。

そしてこのような場合にも、利用者は最終的には、新しい課題に向かって研究を行うために博物館を利用するわけであり、博物館資料の利用の課題はやはり研究という問題に結びついている。

6 学芸員にとっての資料と研究テーマ

これにたいして、学芸員の研究にとっての資料とはどのような位置にあるのであろうか。博物館で行われる研究が分類学である必要はないであろうことはすでに述べた。しかし博物館はあくまで博物館であり、大学や研究所ではない。やはり博物館としての研究に対する考え方があると思う。

倉田ら（1997）は博物館の研究を次の三つであるとしている。

すなわち、その一は、資料の収集保存についての科学研究であり、その二は、博物館資料についての研究、つまり人文、自然科学の学問体系にあるそれぞれの専門分野の研究、そしてその三は、その資料（モノ）とヒトとの結びつきに関する教育学的研究と考えられる。

ここでは資料の研究と資料を使った研究が上げられており、やはり博物館で行う研究は資料に結びつくという考え方である。また加藤（1996）では博物館の研究を資料の専門的研究、資料の保存科学的研究、博物館学の研究の三つであるとし、その前提として

人文科学・自然科学の諸科学に関する資料を、学問的に分類体系化し、そこに基礎学を確立し、さらに地域社会における政治・経済・社会・文化・産業等に関する郷土社会の史的研究と、それらを培った自然の様相をとらえて、地域の人間社会の立体的・総合的学問の確立を図り、郷土の理解を深める資となすことに、その目的を見出すことができる。

としている。したがって加藤は資料の専門的研究を、資料その物についての研究というよりも、より広い視野で地域の社会や自然との関わりで考えるということである。

この加藤の考えは、現場での学芸員の考えに近いであろう。現場では後二者の研究での立ち後れはともかくとして、資料の専門的な研究については、資料そのものの研究とともに、資料に関わる地域での研究が行われている。そして地域社会や自然に関わることであれば、その分野やテーマはかなり幅広く自由に研究が行われるようになってきている。しかし改めて博物館の研究の特長というものを意識しておくことも求められるのではないだろうか。

資料研究との関わりで、学芸員はどのようなテーマで研究をすべきなのかが問題となり、悩んでいる学芸員は多い。研究のテーマの決定等については学芸員個人の問題であって、ほかからの意見等が立ち入ることではない。しかし研究が非常に個人的な問題であるとしても、博物館としての目的や理念に関わった研究のテーマがあり、博物館の研究総体としては、その目的に沿ったもの、あるいはその目的を実現することにつながるような研究をすすめることは必要になるであろう。つまり学芸員個人に対して求められる研究テーマはある。

また博物館という場で研究を行うのであれば、博物館という場を活かして資料や人のネットワークを活用できるような研究を行う方が自然であり、また他の研究機関で研究を行う研究者に対して、非常に有利な点であろう。また他の研究機関ではできないこととして、非常に広い分野の学芸員が一緒に研究を進めるために、まったく新しい学際的な分野や、他分野の視点を取り入れた新しい発想等を持つことができる。このような博物館だからこそできる研究があり、そして研究を行うことで収集できる資料や人のつながりは、研究のテーマにかかわらず、博物館にとっては非常に貴重なものとなる。

このような条件をすべて満たす研究のテーマというものはおそらく存在しないだろうが、現実の課題として、学芸員個人にとっては、自分が選んだテーマとして追及している研究テーマに対して、博物館の学芸員として新たに選んだ研究テーマを決めて、その両方のテーマを持ちながら研究を続けていく、

そして可能であればそういう研究テーマの数を増やし、その横つなぎを自分なりに行っていくことができれば、学芸員という立場を一番活かした研究が行えると考ええる。したがって、学芸員の専門とする研究テーマがどのようなものであったとしても、博物館で行う研究であることの特長を活かしたテーマを求めていくことで、成果を上げ、博物館としての業績にもつながっていくであろう。そして研究と資料の収集という点から見ても、より広範な分野の資料の収集へとつながっていくであろうことは、すでに述べた通りである。

このことは博物館での個人研究のあり方として、整理をしておくことが必要な課題であると考えている。

7 まとめ

本稿では二つの議論を行った。一つは博物館資料を研究との関わりという視点で見直してみると、どの様に位置付けられるか、ということであり、もう一つは、博物館資料を利用する側の立場から考えると、博物館資料とはどのようなものと考えられるのか、ということである。両方の議論とも、いくつかの論点があるが、共通しているのは、博物館という場が、地域と結びつき、利用者から利用されるためにはどの様にすればいいのか、という実践的な課題の裏付けとなる課題整理をしたいということである。

そして博物館資料を研究や利用と関わって考えると、資料の本質があきらかになるとともに、博物館の事業は全てが結びついて行われているということが、具体的に見えてくるものである。資料の位置付けをどうするかで、博物館の研究方針、資料収集方針、あるいは日常の事業の方針に対しても大きな影響があり、特に地域と博物館とがどのように結びつくことができるのか、ということにも関係する。

研究が博物館の中でおこなわれるだけでなく、地域と結びつき、その過程で資料の収集が利用者とともに行われ、整理や活用までも利用者とともに行われることを想定した資料の収集と研究が行われることで、博物館が地域の中で活用される機関として位置付けられるだろう。

そしてこのような資料の活用は現実にも博物館現

場ではかなり普通に行われつつあり、そのような現場での例の掘り起こしと、その理論化がさらに必要と考える。

文献

- 安藤正人 1998 記録史科学と現在 アーカイブズの科学をめざして 吉川弘文館 東京 352+18
- 青木豊 1985 博物館技術学 雄山閣 東京 231pp
- 青木豊 1999 博物館資料の分類 博物館資料論 新版博物館学講座・5 雄山閣 東京：13-104
- 新井重三 1973 博物館における「研究」の性格と機能的にみた博物館の分類 博物館研究：45 (2) 1-20
- 有元 修一 1999 はじめに 博物館資料論 (大堀 哲 監修) 樹村社 東京：Ⅲ-Ⅳ
- 千地 万造 1978 博物館における調査・研究 調査・研究と資料の収集 (千地万造・編) 博物館学講座・5 雄山閣 東京：3-52
- 段木一行 1998 博物館資料論と調査 雄山閣 東京 296pp
- 藤原学 1998 博物館資料の収集と保管 博物館学概説 (網干善教・編) 関西大学出版社 大阪：116-125
- 浜口哲一 2000 放課後博物館へようこそ 地人書館 東京 239pp
- 浜根洋 1963 博物館学について 博物館研究：36(12) 3-4
- 樋口弘道 1997 博物館資料論 博物館学教程 (大堀 哲・編) 東京堂出版 東京堂：67-84
- 伊藤寿朗 1993 市民のなかの博物館 吉川弘文館 東京 190pp
- 金山喜昭 2000 「教える」から「学ぶ」への転換 学び心を育てる博物館 (博物館と学校をむすぶ研究会) ミュゼ 東京：8-23
- 加藤有次 1996 博物館学総論 雄山閣 東京 378pp
- 加藤有次・他 (編) 1999 博物館資料論 雄山閣 新版博物館学講座・5 東京 247pp
- 加藤有次 2000 博物館史 博物館学概論 新版博物館学講座・1 雄山閣 東京：27-46

記録史料の保存・修復に関する研究集会実行委員会
1995 記録史料の保存と修復 文書・書籍を未
来に遺す アグネ技術センター 東京 240pp
倉田公裕・矢島國雄 1997 収集論 新編博物館学
東京堂出版 東京：149-176
日本博物館協会 1973 自然史博物館の収集活動
日本博物館協会 東京 293pp
布谷知夫 1998 参加型博物館に関する考察 琵琶
湖博物館を材料として 全日本博物館学会誌
全日本博物館学会 23(2)：15-24

大場達之 1988 おわりに 神奈川県植物誌 1988
神奈川県立博物館：1413-1414
菅根幸裕 1988 民俗資料再考 民俗世界と博物館
(日本民俗学会・編) 雄山閣 東京：108-
113